
セラフィド物語

らいとてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セラフィド物語

【Nコード】

N7701R

【作者名】

らいとてん

【あらすじ】

村娘セラフィドは弟スタインと二人仲良く暮らしていた。が、そんな彼女の平穏な辺境ライフは、弟の宣言によって音を立てて崩れる。「セラ姉。俺、騎士になる！」これは、とある姉妹の人生の転機となった一日の物語である。

【1】鳴く雛黙るセラフィド

ぼんやりと空を見上げる。
どこまでも果てしなく続く青。
ああ、今日もいい天気だ。

雲一つない快晴の下、せっせと畑を耕す農民が一人いた。

ふと手を止め、青空を見上げた農民は、眩い太陽に目を細める。
翳した手に思い出すのは、旅人の話だった。彼曰く、貴族の手は白く細く滑らかなのだそうだ。

（この手とは真逆だな……）

農民である己の手は、日に焼け、武骨で、豆だらけだった。
だが、自分にとってこの手は何にも代えがたい宝だ。
この手で自分は家族の生活を支えてきた。

ふと、脳裏に浮かぶのは、今頃家事に勤しんでいるであろう愛する家族の姿。

（さて、もう一頑張りするか）

『彼女』は再び鋤を握る手に力を込めた。

振り上げられた鍬を遠くから眺めているカラスは思った。本当に、あれが年若い村娘なのだろうか……と。

娘は名をセラフィドと言うらしい。年は二十歳前後だろうか。カラスが聞くところによれば、昨年の流行病で両親を亡くし、現在弟と二人暮らしだそう。両親が残した畑からの収穫物と、村自治団の手伝いをして生計を立てているらしい。

ここまで聞くと、まあ、なんていじらしい子なのかしらとさぞ同情を集めそうな境遇だが、ことセラフィドに限って、『いじらしい』などという可愛らしい言葉は似合わない。

井戸端会議をしていた奥様方曰く、娘婿にしたい村民NO. 1だそう、セラフィド。

彼女は体つきこそ細いが、背はすらりと高い。

美男とは言い難いが、素朴な顔には誠実さと生真面目さが滲み出ている。

無口でめったに顔に感情が出ないのだが、それがまた度量の大きさを示していると、奥様方に好評だった。

そんな『漢の中の漢』といわれる『年若い村娘』。

カラスでなくとも一度見てみたいと思うだろう。

『慎重』なんて言葉は殻の中に忘れてきたぜ！ と豪語する無謀な若いカラスは、さっそく村外れにやって来たのだった。

セラフィドは噂話で聞いた通りの容姿であり、どの人間が彼女かはすぐに分かった。この地方には珍しい亜麻色の短髪が汗をかけた額に張り付いている。確か、東方の山に住む人間があのような色合

いだと聞いたことがあるな、とカラスは興味深げに彼女を観察した。

灰色の瞳はじっと地面を見つめている。

日に焼けた腕は黙々と鍬を動かし畑を耕してゆく。

カラスは、残念だ、と一声鳴いた。

この後、畝に播く豆をお目当てに來たのだが、ありゃあ、無理だ。若造が耕しているという畑ならば、種播き後にちよいとつまんでもばれやしまいと思ったのだが、考えが甘かったようだ。あれは一人前の農夫の背だ。隙がない。諦めて森で木の実でも採るか、と羽を広げた、その時のことだった。

「おい、カラス」

無様に木から落ちなかった自分を褒めてもらいたい。

必死に体制を立て直したカラスが見たのは、己を鋭く睨みつける娘だった。

「二度目はない。次にうちの畑で見かけた時が、お前の最期だ。スープの具にされなくなったら、もう、ここには来るな。」

それが仮にも乙女の言う台詞か？ そんなだから、婚期を逃したんだろう。二十前後で未婚の村娘だなんて聞いたことがない。だいたい、その殺気と威圧感は何なんだ。本当にただの村娘なのか！？と内心叫びながらも、カラスは必死に羽ばたいて巢に戻った。仲間今日出会った奇妙奇天烈な娘のことを教えるために。

セラフィドは知らない。

この後しばらくの間、カラス達が、

「聞き分けのない雛はセラフィドに食べられてしまうわよ」と鳴いていたなんて。

慌てたように飛び去ったカラスを見ながらセラフィドは舌打ちをした。

彼女は知っていた。

カラスも調理法次第で美味しく頂けるということを。

（手元に弓さえあれば、スタンへの御土産にできたのだが）

彼女は豊穡の神に誓った。

（スタイン様。この畝の豆が無事育った暁には、その代金で弓を手に入れて、弟に肉を食わせます）

神から名をとった弟は、村の市で買い物をしている頃だろうか。愛しい、愛しい、弟スタイン。

セラフィドにとって、たった一人だけの家族。

セラフィドは、この時まで知らなかった。

その愛する弟のおかげで、彼女が平穏な辺境ライフとおさらばする羽目になることを。

【2】蕪のスープと弟の決意

扉を開ければ、小さな人影がセラフィドの腰に抱きついてきた。

「おかえりなさい！ セラ姉！」

姉の帰宅を笑って迎えた弟スタインに、彼女は灰色の目を細める。
この笑顔のために今日一日、いや、これまでずっと、彼女は頑張ってきた。

「ただいま。スタン」

手を洗い、席につけば既に夕食の準備はできていた。

スタンに礼を言い、豊穰の神スタインに感謝の祈りを捧げて、ささやかな晚餐が始まる。

ごく薄く塩味をつけた蕪のスープに保存が効く堅パンという質素極まりない献立でも、セラフィドは満足だった。弟と二人、一日の出来事を話しながらのんびりと食事する時間を彼女は何より楽しみにしていた。

「でね、セラ姉。旅人さんがね」

その日、弟が熱心にしたのは数日前まで村に逗留していた旅人の話だった。セラフィド自身は畑仕事で忙しく旅人と会う機会は残念ながら無かった。しかし、頻繁に村の市場まで買い物や農作物等の取などで行く弟は、随分と旅人と仲良くなったらしい。王都貴族の手についての話も、弟が旅人から聞いたものだった。

楽しみに語る弟に、我知らず、セラは微笑みを浮かべていた。

感情が顔に出にくいセラだったが、弟の前では表情筋が緩みがちであった。そうやって微笑んでいる時には年相応の顔に見えるのだが、セラ本人はそのことに気が付いていなかった。普段の無表情からして意識してやっているわけではなかったため、自分が笑った時に周囲が驚愕の表情を浮かべるのを不思議に思うぐらいだった。

そんなスタン限定スマイルを惜しげもなく浮かべていたセラだったが、彼の次の一言に、一気に顔が強張るのを感じた。

「俺、王都騎士団学校の入学試験に挑戦するから」

セラは混乱する頭の中で、それまでの話を整理した。

スタンの言う旅人の話曰く、近年、王都騎士団は戦力低下が甚だしいらしい。

そこで、広く人材を集めるために、これまで貴族子息に限定していた王都騎士団学校の入学資格を平民にも与えることとなったらしい。

（で、その平民枠に、スタンが挑戦する、と。……スタンが挑戦。……スタンが、騎士団学校に）

セラの脳裏に、燃え上がる農村が浮かぶ。それは、ここではない名もなき村だった。今では存在しないその村は盗賊に襲われ、王都の騎士団がついた時には……きっと、少なくとも騎士どもは『全滅』したと思っているのだろう。彼らは知らない。ただ一人、森に逃げ込んだ幼い少女が生き延びたことを。

黙ったままの姉に、スタンは再び宣言した。

「セラ姉。俺、騎士になる！」

彼は気付いていなかった。姉の瞳に宿った獰猛な光に。

真剣な表情のスタンに、突如として、ナイフが突きつけられた。あと少しで目に突き刺さりそうな刃と、ただならぬ殺気に、彼は動けない。固まった弟にセラは今まで一度たりとも彼には見せなかった酷薄な笑いを浮かべる。

「騎士に、なる？……お前、自分の言っていることの意味が分かっているのか？」

低く唸るような声でセラは続ける。

「お前は何のために騎士になる？ 地位か？ 金か？ 名誉か？ 騎士ってのはな、スタン。人殺しだ。国の誇りだとか何とか称えられたところで、あいつ等のやっтерことは、人殺しなんだよ。確かに、あいつ等がいなければこの国は成り立たない。だがな、どんな大義名分があったところで、やっтерことは盗賊と同じだ。なあ、スタン。お前に人を殺す覚悟はあるのか？」

硬直したまま言葉一つ発せぬ弟に、セラは一つ溜め気をつき、殺気を収めた。

（まったく。その旅人とやらは、とんでもない置き土産を残して行ってくれたものだ。……次に村に来た時にはそれ相応の『お礼』をしないとな）

セラはナイフを持つ腕を静かに下ろした。しかし、スタンはまだ

動けなかった。

「やめておけ、スタン。騎士なんて碌な職業じゃない。給料が高くても、常に命の危険が付きまとう。命あつての物種だ。例えば一生樂はできなくとも農夫になった方がましだぞ。それに、あの程度の殺気に固まるようでは実戦なら一瞬でやられている。お前には、無理だよ」

愛する弟にしたいことではないし、進んで言いたい言葉でもない。だが、セラは知っていた。この弟の子供とは思えない聡明さと頑固さを。だからこそ、乱暴な方法でも、きつく叱った方が良いと思ったのだ。

夕食を続けるぞ、と告げた姉に、ようやく動けるようになったスタンは、叫んだ。

「違う！」

不機嫌そうに目を細めたセラに、怯みつつもstanは言った。

「騎士は、民のためのものだ。俺は、俺達みたいな国民を守る騎士になりたい！」

「ふざけるな！」

セラの怒声が響く。

「騎士が、民を守る？ あいつ等が、私達を守ったことがあったか？ この村に流行病が蔓延した時、あいつ等が何の役に立った？ 騎士ってのはな、スタン。王様とお貴族様のためにあるものだ。俺たち民のことなんて考えてない」

「そんなことない！ 確かに、今、騎士団はうまく機能していない。けど、本来、騎士は民のためにあるものだって。そのための改革がもうすぐ始まるって。そうブライトさんが言ってた！」

ブライトとは、旅人の名だったか。頭の片隅で冷静な自分がそう呟くのをセラは聞いた。

「それが本当かどうか、分かるものか！」

「本当だよ！ 少なくとも僕は信じる！」

蕪のスープが冷めるまで、二人の怒鳴り合いは続いた。

だが、セラの一言をきっかけに、スタンは黙り込んでしまった。

「どうしてそこまでして騎士になりたがる？」

そのセラの問いにスタンは俯いた。そんな弟にセラはさらに畳みかけた。

「私に言えないような理由か？ だったら許すわけにはいかないな」

唇を噛みしめていたスタンは、その言葉に顔を上げた。

「だ、だって！ 俺が騎士だったら、セラ姉の村を救えたかもしれない！ ない！」

思わぬ言葉に、今度はセラの方が絶句した。

「セラ姉、言ってただろ。セラ姉の村を騎士が護ってくれたら、セラ姉は、たった一人で、あんなにボロボロになって、つらい思いをしなくて済んだかもしれないのって。だから、俺、騎士になる！ 騎士になって、セラ姉みたいな思いをする人がいなくなるように、民のための騎士団を作るんだ！」

真摯な瞳で訴える少年は、両親によく似た顔立ちだった。

血の繋がらないセラを、家族として受け入れてくれた彼の両親に。

（まったく。敵わないな）

セラは溜息をついた。

「スタン。言っただろう？ 村が盗賊に襲われて、一人になって、生きるためにお前に言えないようなことを色々して、そうやって、毎日を生き抜いて、確かに苦しかった。でもな、そのおかげで私はお前の姉になれた」

セラはそつとスタンの頭を胸に抱え込む。

「だから、泣くな。スタン。お前が悲しむことはない」

何時の間にか、スタンの頬には幾つもの涙の筋が流れていた。愛する弟の柔らかな髪をセラは優しく撫でてやる。その焦げ茶の髪は、彼の父親譲りだ。

「私は幸せだよ。こんなに姉思いの弟を持てて。ありがとう。スタン。私に、名前と家族と生きる意味をくれて。お前は私の全て。お前の幸せが、私の幸せ。お前の望みが、私の望み」

じゃあ、と胸元の弟から声がした。眼を赤くしたスタンが顔を上げる。髪と同じ焦げ茶色の瞳は、彼の母親譲りだ。

「王都騎士団学校に入ってもいい？ 俺の望みは騎士になることだから」

今度はセラがスタンの肩に顔をうずめる番だった。思いつきり脱力しながら、姉は思った。

この頑固さは、彼の両親譲りなんだよなあ、と。

【3】セラフィドの木の下で

セラフィドはその国の国花であった。

糸のように細く淡い緑の葉の間から覗く小さな白い花は、春の使者。

芽吹きの際には國中至る所で咲き誇り、花盛りともなれば其処此処の村々で花見と称した宴が夜ごとに開かれ、お祭り騒ぎとなる。人々に愛されるセラフィドの木は、農民から貴族まで広く人々に愛でられ、どんな辺境の村にも必ず一本は植えられているのであった。

そのセラフィドの木は村はずれにあった。

小高い丘の上から穏やかな辺境の村を見守ってきた大木は、御神木と大切にされていた。

その日、村は柔らかな霧雨が降っていた。

白く小さな花を沢山咲かせたセラフィドは、物憂げに葉を揺らめかす。

春雨に濡れそぼった枝葉は色を濃くし、花は白く艶めいていた。見れば、その根元に黒い塊がある。

（人だ。年若い。女の。眠っている。……誰か来た。別の人間だ。男。幼い）

セラフィドの若葉達は揺らめく。

——ここにおいで、と。

セラフィドの花達は舞い散る。

——見て、君たちの仲間がいるよ、と。

セラフィドの呼び声に誘われてか、一人の幼子が丘を登ってきた。

彼は、セラフィドの根元に倒れた人影に目を丸くし、恐る恐る近づく。

だが、その泥にまみれた幼いた顔を見て、彼は肩の力を抜いた。自分より年長ではあるが、まだ幼さの残る顔立ちが、警戒心を薄れさせたのだ。

彼はまじまじと、その泥だらけの全身を観察した。

頬の瘦けたその顔は、血色がよくなかった。

服の上からでも、その体がやせ細っているのが分かる。

彼が興味をひかれたのは、その亜麻色の髪であった。

髪も瞳も焦げ茶色が多いこの地方では珍しい色。

幼き者特有の無謀さから、彼は亜麻色に手を伸ばす。

短い髪は、お世辞にも手触りがいいとは言い難かった。しばらく撫でていると、その人物の瞼が動いた。

ゆっくりと開いたその瞳の色は灰色。

「きれい」

思わずといった風に呟いた彼を映した瞳は、やがて、再び重たげに閉じられた。

閉じる寸前、灰色の瞳の持ち主は呟いた。

「セラフィ……ド」

亜麻色の髪と灰色の瞳の持ち主は、スタインの姉となった。
名は無いと言った少女に、スタインは言った。

「ねえ、ねえ。じゃあ、お姉ちゃんの名前は、セラフィドにしようよ」

「あら、どうして？」

尋ねた母親に、スタインは目を輝かせて答えた。

「だって、セラフィドの木の下で眠るお姉ちゃんは、キラキラしてて、まるでセラフィドの妖精のようだったよ」

その台詞に少女は真っ赤になった。

教会の宗教画で中性的な美貌とともに描かれる春の使者に、まったく自分は似てなんかいない。あんなに綺麗な存在と自分を一緒にしたらだめだ。

必死にそう主張する少女に、少年は反論した

「お姉ちゃんは綺麗だよ。セラフィドの花みたいに」

絶句したセラフィドの頭を母親は撫でた。

「そうね。ぴったりだわ。セラフィド」

父親もそれに頷く。

「人々に天の祝福をもたらすセラフィド。うん、いいじゃないか」

自分は祝福なんかもたらせない、と呟いたセラフィドに母親は微笑んだ。

「そんなことないわよ。ちゃんと我が家にセラちゃんは祝福をくれたわよ。ねえ、スタン」

うんっ！ とスタインは元気よく返事をした。

「セラ姉はね、僕にお姉ちゃんをくれたんだ」

正解だ、と父親がスタインの頭を撫でる。

「そして、俺たちには可愛い娘を、な。セラ、我が家にようこそ」

そして、四人は仲良く暮らしたのだった。

数年後、流行病で両親が亡くなるまで。

セラフィドは、両親から教わった花言葉を思い出す。

（セラフィドの花言葉は、『祝福の使者』、『純真無垢』、か。まるで、この膝で眠る弟のような花だな。）

葬儀が終わり、泣き疲れて眠る弟に、セラは誓った。

（私にとって、セラフィド『祝福の使者』は、お前だ。スタン。お前は、私に名前と家族と生きる意味をくれた。誓うぞ、スタン。私の全てはお前のために。お前の幸せが私の幸せ。お前の望みが私の望み。お前こそが私の生きる意味）

その誓いの下、セラはスタンと二人、暮らしてきたのだった。

「スタン、そろそろ出発するぞ」

セラはセラフィドの木の下で何かを祈っている弟に声をかけた。

二人はこれから、王都騎士団学校の試験会場の一つであるマカンに向かう。

大体、徒歩で二週間といったところだろうか。

家と畑は他人に貸すことにした。

一人で大丈夫だからセラ姉は村に残って、とスタンは言ったが、過保護なセラがそれを許すはずもなかった。

祈り終わったらしい弟が、丘を駆け降りてくる。

そのままの勢いで姉に体当たりしてきた小さな宝物を抱きとめてセラは問いかけた。

「なんてお祈りしていたんだ？」

秘密、と笑う弟とじやれる姉。

そんな姉弟をセラフィドの木は、若葉を揺らしながら見守っていた。

その枝には、まだ小さく固い蕾がある。

スタンが試験に受ければ、この蕾が花開く頃、二人は王都にいることになる。

「さあ、行くぞ」

「うん」

セラフィドの木は次第に遠のく二つの人影に向かって、薄緑の葉を靡かせていた。

まるで、二人に祝福を贈るかのよう。

いつまでも、いつまでも。

『セラフィド様。例え、この村を離れても、俺達は二人仲良くこれからも生きていきます。どうか、セラ姉と俺を出逢わせて下さったセラフィド様に豊饒神スタイン様のご加護がありますように』

【3】セラフィドの木の下で（後書き）

本編はこれにて完結です。

ここまでお読みいただきまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7701r/>

セラフィド物語

2011年5月3日11時49分発行